前世と私 続

卓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
前世と私　続

【Ｎコード】
Ｎ８３６３Ｔ

【作者名】
卓

【あらすじ】
「前世と私」と続編を統合、加筆修正中です（ °∇° ）

ブロローグ　（改）（前書き）

お詫び

「前世と私」の短編をブロローグとして載せ、加筆修正しました。

異世界トリップ物から、異世界間トリップ物に変更しました。

ちなみにタロウのいる地球と、異世界ミノスのトラベル物です。

読んで下さっていた方々、申し訳ありません。

タロウの前世を　漁師⇒神官に直しました。１０／２４

プロローグ　（改）

「ヒイラギ催眠研究所」と書かれた都心の雑居ビルの一室にて

カーテンの引かれた薄暗い部屋のイスに、男が座っている。

身長は１７５センチ、黒目黒髪のいたって平凡な容姿だ。

平凡な男の名前は、山田タロウ。独身二十歳。専門学校を卒業。ただいまニートである。

タロウの人生は平凡の一言につきる。幸も不幸もなく人間関係にもトラブルはない。

そんな彼が、いま催眠療法を受けに来た理由を説明しよう。

いまを遡ること、数ヶ月前。タロウは近所の公園で催されたフリマーケットにきていた。

そこで一枚の「扉の描かれた石板」を買ったことからはじまる。

サイズにしてＡ４くらいの石板に、ただ扉と象形文字らしきものが描かれていた。なんとなく、タロウは気になってかったのである。

最初は部屋に飾っていたが、しばらくして友人にその石板をあげてしまった。

それからというもの、石板が気になってしかたなく、日常生活にも支障をきたし、ついに友人から絵を返してもらって落ち着いたのだった。

タロウのあまりの執着ぶりに、異常を感じた友人は、催眠療法の一種である「前世療法」をうけてみたらどうかと勧めたのであった。

まず、「前世療法」をしらない方のために説明したい。

前世療法（ぜんせいりょうほう）とは、催眠療法の一種であり、退行催眠により患者の記憶を本人の出産以前まで誘導（＝　過去生退行［1］）し、心的外傷等を取り除くと主張されている。

前世の記憶は虚偽記憶の一種であるという批判があり、かつて催眠によりありもしない記憶が作られた例が多くあった。

そのため、前世療法を利用する人は注意が必要であるともされている［2］。しかし、中には本人の知るはずの無い史実と一致する正確な記憶を話す事例も存在する。

ウィキペティアより抜粋

タロウの隣に白衣を着た老紳士がやって来た。この研究所の所長のヒイラギである。

「でわ、山田タロウさん。これより前世療法にうつります。」

老紳士の、穏やかな声が室内に響く。

まずは、私の指示にしたがって呼吸をしましょう。次に１０→１へ数えます。数は減っていく毎に、緊張がほぐれていきます。

「１０・・・まずは、肩の力がぬけていきます。　９・・・次に腕の力　・・・・　０．・・・・　はい、体はほぐれてリラックスしています。」

タロウは、緊張しながらもヒイラギの声にあわせて行くうちに催眠状態に誘導されていった。

「でわ、私が３つ数えると目が覚めます。気分もすっきりいい気持ちです。３・・・・　２・・・・　１・・・・　はい、目を開けてください」

「タロウさん、気分はいかがですか？」

「はい、頭もスッキリで気持ちいいです。熟睡したみたいでした。」

「それは良かった。あなたが、催眠中に見たものはレポートにしましたので、あとで確認してくださいね。」

「はい、ありがとうございます。」

タロウは、レポートをうけとると会計をすませて研究所をあとにした。

タロウの部屋

タロウは、ヒイラギから渡されたレポートを手にした。読んでみると前世はエーゲ海に面したところに住んでいたようである。しがない神官であり、子供にも恵まれ幸せに暮らしていたようだ。だかそんな幸せも長く続かなかった。突如、島の火山が噴火し街を飲み込んでいった。
家族ともはなれ、最後は火砕流に飲み込まれて死んだ。

「なんかスゴイな。嘘か本当かわからないけど。物語だとしてもよく出来ている。」

タロウの独り言だが、偽りのない感想だろう。急に前世を信じろといわれても、戸惑うばかりだ。だが、タロウの見た記憶のなかに変わったものがあった。∞（無限大）のマークに真ん中に棒を引いて、中に似た刻印を見たのだ。そこは、村人が非難していた場所に書かれていた。

「まあ、鮮明な記憶らしいモノもあるから。図書館でしらべてみるか。」

今までの、タロウの生活ではヨーロッパ。なかんずく、地中海など縁も所縁ない。もし、図書館で調べてみて、この図があれば前世の

記憶と言えるかもしれないと、考えたからである。

「よし、コレで行こう！」

タロウは、図書館に向かうことにしたのだった。

図書館にて

昨今の図書館は、近代化がすすんでおり本の検索も楽だ。まずは、受付側のパソコンに、キーワードを入力していく。

カチャカチャカチャ

「　地中海　火山　ｅｔｃ・・・　」

ピーガチャ　ガチャガチャ

検索結果が出てきた。どうやら地理歴史コーナーに関連の本はあるようだ。

目ぼしい数冊をとり、イスに腰掛けて読み始める。

いくつか読み始める内に、とうとうタロウが前世の記憶としてみた刻印がみつかった。

「あ、これだ！」

手には、”クレタ島とミノス文明の考察”

という本が握られていた。どうやらタロウがみた刻印は、”ミノスの聖斧”といわれるもので、当時のミノス文明の神殿あとにみかけるものらしい。

「まじかよ・・　」

まさか、行った事も聞いたこともない刻印が存在するとは。タロウは驚愕するのだった。

ここでクレタ島とミノス文明について話しておきたい。

クレタ島とは、地中海に浮かぶ島の中で５番目に大きく、面積はおよそ８３００平方キロメートルの島で、ヨーロッパにおける最古の文明”ミノア文明”が栄えた。ミノアといえば、思いつく人もいる

かもしれないが、ギリシャ神話に出てくる”ミノタウルス”頭が牛の怪物発祥の地でもある。

またミノア文明は、紀元前３０００～１４００年に栄えた巨石文明巨だ。巨大な石の文明と言えば、エジプトのピラミッドを思い起こすだろうが。ミノア文明も負けず劣らず、精巧なつくりと巨大な石をつかった建造物は圧巻だ。一説によると、各家庭には上下水道が完備され、お湯まで配管してあったとも言われている。

閑話休題

タロウの部屋

「それにしても、驚いたなあ～」

タロウは、ブツブツと独り言をいいながら自分の思考を整理しはじめた。

一点目。前世療法で見た記憶にはいくらかの信憑性がある。

二点目。石板と自分の前世についての関連が分からない。

三点目。石板に描いてあった絵は、どの本を読んでも載っていなかった。

「ここは、ひとまずヒイラギに相談だな～」

タロウの前世にミノス文明がかかわっているのは分かったが、石板とのの関係が不明であると結論し、石板の謎を説く為に、しばらくはヒイラギの元に通うのだった。

一ヶ月後

「うう・・・・」

夜明け前のまどろみの中に、コウタはうなされていた。
前世療法を行うようになってから、夢をよく見る。ヒイラギが言うには、過去の体験を脳が処理する為に見るそうだ。

コウタは最近の夢を振り返る。

みる夢は、神官だった時の事がよく出てくる。白いローブをきて病人やケガ人を治療したり、スラムに赴き葬送をしたり。はたまた同僚と飲んだり。楽しい事悲しい事、様々だ。　だが決まって最後は、

火砕流に飲み込まれて終わる。そこで目覚めるの繰り返し。

だが昨日は違った。

火砕流に飲み込まれる直前、あの石板が出てきた。

何か呪文を自分が唱え聖斧の印を描く度に、人々が通っていく。何をしているんだろうか？

通る人々は徐に、自分をみて深々と頭を下げていく。

とても自分は満足しているように思える。

そして火砕流が押し寄せ、夢が覚めた。

転移　（改）（前書き）

大幅に加筆修正しています。申し訳ありません。

修正後

タロウは異世界間を自由に移動できるようになりました

転移（改）

扉の夢をみて数日たった。夢をみる度に細部が明らかになってくる。
部屋の調度品や人々の話声など。
そして扉の役割・・・・
それは異世界への扉

夢は、迫り来る文明の滅びから人々が、異世界へ逃げて行くところだった。

タロウは此処まで来ると、夢の真偽を確かめてみたくなった。

「よし、試してみよう！」

タロウは石板の前に立ち、手を翳して呪文を唱える。

「○×△◆□～」

どこの言葉とも解らないが、夢の中と同じよう唱える。

シーン…

シーン…

シーン…

「やっぱり何も起きない・・」

やはり空想だったのだろうか？

それから何回かやってみたが、やはり何も起きない・・

「アホらしい。　昼寝でもしよ～」

タロウはベッドによこになるのだった。

数時間後・・・・

目が覚めると？辺り一面、花畑だった。色とりどりの花咲き、辺りには甘い香りがする

「夢の中で夢でも見ているのかな～でも、匂いまであるって」

戸惑いながら辺りを見回すと、木陰の側にベンチがある。

「よし、とりあえずあそこに座るか。」

３０分くらい歩いてようやくついた。

「よっこらしょ。ふぅ～のど渇いたな～」

ベンチに座って呟く。

「はいどうぞ～」

「どうも～」

タロウは横から出された飲みものを受け取る。

「くはぁ～うめえ」

タロウはゴクゴクとのどを潤した。

「お代わりいります？」

「じゃあ、もうちょっとって♪あなたどちら様ですか？」

そこにはイケメンがいた。

「私ですか？そうデスネ。色んな呼び名がありますが、分かり易く言うと、神様デスヨ。」

「はあ・・神様ですか・・夢でもって会えるなんて、スゴいな」

「夢じゃないヨ」

神様と言う男が、タロウの頬を抓る。

「イテテテ・・・」

「ね、夢じゃないデショ？」

「じゃあ俺、死んだんですか？ここは天国？」

「半分あたりカナ～君は死んではいナイヨ♪ここは狭間ダヨ」

「狭間って？」

「世界と世界の狭間ダヨ」

「なぜ狭間に俺いるんでしょう？」

「君が自分で来たんダヨ（笑）転送門を開いて」

「転送門って、あの扉の事ですか？」

「そうダヨ（笑）あの石板ダヨ」

「あれ、何にも起きませんでしたよ？」

「たぶん古かったから、動くまで誤差あったんじゃないのカナ（笑）」

「そ～なんうですか・・・　ちなみに元の世界に帰れますか？」

「う～ん帰れるけど、魂だけダヨ（笑）」

「魂だけですか？」

「カンタンに言うと、山田タロウは死んで、別人として生まれ変わるんダヨ（笑）」

「どうして、来るときは肉体ごとこれて…帰る時は、魂だけなんで

すか？」

「そうダネ。それには世界の成り立ちについて話さないといけナイナ。」

「ぜひ、聞かせて下さい」

「じゅあ話はじめよう～」

以下神様の話（概略）

タロウのいた世界は、何度も世界の創造が為されている。創造と言っても、地形から生物の生態系。はたまた、文明の転換などなど。（マヤの暦やインディアンの神話には、なんども世界が滅び、今があるとかないとか）

また世界が創造を繰り返すのは、神様の世代交代による為らしい。

あとは、神様ごとに活動方針が違うとの事。（タロウのいた文明は科学が発達していたが、過去には魔法の発達した文明があった）

タロウと神様の会話戻り

「ここまでは、解ったカナ？」

「おおよそ解りましたが、なぜ帰りは魂だけに？」

「カンタンに言うと、君の魂は私が創ったもので。君の身体は今の神様が創ったんだよ」

「それなら、俺の存在はオカシイはずじゃ？」

「それは魂は不滅で、神は新たに魂を創造するけど、今まであった魂を用いて生命を創造もする。君のように」

「つまり、自分は後者にあたる存在で、元の世界に帰ると、別人として再創造されるって事ですか？」

「ビンゴ！（笑）その通りダヨ♪」

「なんとか帰れないですか？」

「う～ん、方法が無いわけでもないヨ」

「それは？」

「神の試練をクリアーする。もう一つは、世界に対する大きな貢献をする。そうすれば神様協定で、異世界間通行を許可デキルヨ！」

「では、神の試練とは？」

「異世界ミノスには、幾つか僕の造った迷宮があるんだ。それを全てクリアーすればイイヨ！」

「じゃあ、大きな貢献とは？」

「これは、世界規模の戦や飢饉・疫病を食い止めるとかカナ。要は世界規模の人命救助ダヨ～」

タロウはしばらく悩んだ。

「う～ん、どれも途方も無いなあ」

「ちなみに前世の功績も有効ダヨ～」

「前世ですか？そう言えば、転移門を開いて沢山の人を助けたみたいなんですが…」

「ふ～む、どれどれ…」

神様はおもむろにファイルを取り出した。ペラペラと捲っている。

「え～と、キミは沢山の人を救っているね。それも現ミノスの人々の先祖８割以上だ。結論はキミは特例で異世界間の通行を許可できるヨ♪」

「やった～！じゃあ帰れるんですね？」

「もちろん帰れるヨ。オマケに好きな時に、異世界にも行けるヨ♪」

「おお～！すげー」

「まあ、異世界間許可なんて初めてだけどネ」

「ありがとうございます」

「あとは、通行許可の特典として、君が前世で得ていた力を行使デキルヨ♪」

「どんな力ですか？」

「そうだねぇ～。説明も飽きたから、しおりにして渡しておくから後で読んで。」

神様からチョカーが渡される。（革紐に銀製の魚がついている。）

「手に触れて願うとガイドブックが出るから、それ読んで。」

それからタロウは改めてお礼を言って、転移門を開いて帰って行ったのだった。

転移　（改）（後書き）

今後の話も加筆修正します。全く別の話です。すみません

冒険の準備　（追加）

朝、自分の部屋でタロウは目覚めた。
神様との出会いは夢かと思ったが、首に手をやるとチョカーがあった。

「やっぱり夢じゃないんだなあ～」

何度目チョカーを触り確認して落ち着くと、今度は自分が異世界旅行できるのかと思うと、タロウはワクワクしてきた。

「異世界かあ。どんな世界だろう。確か前世の力も使えるって言ったっけ…」

タロウはチョカーに手を伸ばし、教えてとつぶやいた。

すると：異世界の歩き方：（ｂｙ神様著）と書かれた本が現れる。
タロウはペラペラと捲り読み始めた。

異世界の歩き方から

１　異世界ミノスとは

古代クレタ文明から端を発した中世ヨーロッパ的な世界。また、魔法や錬金術などが発達している。

地理的には、クレタ本島（もはや大陸）を中心にその周辺に島が幾つかある。

２　ミノスの通貨

通貨の単位は、ガリル。
１ガリル（十円）は銅貨。
１０００ガリル（一万円）は銀貨。
１００００００ガリル（百万）は金貨である。

ミノスの平民の月収は、銀貨２０枚。

３　時間について

ミノスでの１日は、現実世界での１時間　である。

おおよそタロウは調べ終わり、本を閉じた。

それからのタロウは、深夜は異世界。昼間は寝るのニート暮らしに拍車がかかるのはこれからの話である。

異世界初日（改）（前書き）

訂正後

地下迷宮→迷宮が各地に点在する

異世界初日（改）

タロウ　ｉｎ　異世界

今タロウは、迷宮挑戦者の為の寮、：新緑寮：に来ていた。　狭間から異世界：ミノス：で最初に来た場所である。

新緑寮は、迷宮挑戦者の中でも見習い～新米の為の寮である。

ふくよかな、中年の寮母さんから、迷宮について説明があるようだ。

「は～い注目！みんな知っていると思うけど、これから注意事項を説明しますね。」

まず迷宮から

ミノスの各地には、には迷宮が点在しています。

ここ新緑寮は、Ｆ迷宮：新緑の宮：の案内所施設です。（迷宮の難易度は、最下位Ｆ～最高Ｓランクまである）

ちなみに迷宮は、神様が作った物といわれています。

ランクが上がる程強い魔物がでます。

あと迷宮クリアーの報酬として、魔法や技などを伝授されます。

これは実力に見合った力を授ける、神様の計らいによる為です。

また迷宮内では、希少なアイテムも報奨としてもらえる事もあります。

そして、重要な事を最後に２つ。

１つ目

迷宮内には、帰還石を持たないとはいれません。帰還石は、迷宮からの帰還や瀕死の時に自動的に神殿に転送する機能があります。

帰還石の種類は、様々な鉱石の物があり、挑戦者のランクで変わります。君達見習いは、ヘマタイトで出来た物です。

２つ目

迷宮クリアー毎に実力測定が行われ、挑戦者ランクの更新があります。

必ず受けて下さいね（ ∀-）

以上です。

こうして寮母さんの説明は終わり、異世界初日は過ぎていくのだった。

いざ迷宮へ（改）（前書き）

１０／２４　魔法に対する細かい解釈を追加しました。

いざ迷宮へ（改）

迷宮　潜入直前

タロウは新緑寮から歩いて１０分程の迷宮入り口に来ていた。　杜の中にある入り口は、ピラミッドの土台だけのような石造りの物で、台形の真ん中には、地下への階段が見えている。

「いよいよ迷宮かあ。戦闘あるんだろなぁ～。あ！そう言えば、俺戦えるんだろうか？」

平和な日本から来たタロウが、果たして魔物と戦えるんだろうか？

タロウは今更だが不安になる。

おもむろに、神様からの餞別？を確認する。

特殊強化ローブ（濃紺）

※炎などのあらゆる属性抵抗付

聖杖　（黒色の木製の棒、長さ１．８ｍ位）

※世界の狭間に生える樹からできた杖。、神力増幅機能付

銀製のチョカー（四次元ポケット）

異世界の歩き方（神様著）

※タロウのステータス確認や、迷宮の歩き方など掲載

を改めて確認し、その中からガイドライン（以下本）を取り出し、ステータスの確認をする。

タロウのステータス

神聖魔法　レベル３
杖の扱い　　レベル３
聖別技術　レベル３
※品物に聖なる波動を込める

ＭＡＸ１０の内の３なので、チートでもなく平凡だ。

「これって、前世からの能力だよなあ～。神聖魔法ってなんだ？」

本をめくり、魔法の項目を読む。

魔法には、神官が使う神聖魔法と魔術師が使う混沌魔法が存在する。前者は神力を源とし、後者はマナを源とする。

神聖魔法とは、この世の理と同調してその力を引き出す。いわば共鳴作用である。

混沌魔法とは、この世の理を理解し、術式を組み立てて力を行使する。いわば、世界律の模倣である。

まあできる内容については両方とも、よくあるＲＰＧそのものだった。また神官についても、神力を扱う者の総称であり、神殿は神力を扱う魔術師のギルドって感じだ。

次に迷宮について

新緑の宮は、１０階層の職業専用ダンジョンである。職業に見合った敵しか出て来ない。ここで個人の実力を付けてから、ＰＴを組めとの神様の計らいらしい。

以上確認終わり

「さて、行きますか～」

タロウは不安になりながらも初ダンジョンへと、階段を下りていくのだった。

戦闘開始（改）

迷宮1階

地上からの階段を降りると、約２０畳ほどの石壁造りの小部屋についた。　迷宮には所々に光鉱石でできた照明があり、明るい。

小部屋から出て、幅２m位の通路を進む。しばらく進むと曲がり角になっているようだ。

曲がり角の先から足音が聞こえてくる。
ヒタヒタヒタ　…
ヒタヒタヒタ…
ヒタヒタヒタヒタ…
段々と大きくなる。

「いよいよ魔物か！？」

タロウは内心ビビりながらも、歩を止め相手が近づいてくるのを待つ。　曲がり角を過ぎて接触なんてまっぴらだからだ。

杖を握りしめ、指先に神力をかき集める。

ヒタヒタ…
ヒタ…

足音が鳴り止む。
どうやら向こうも曲がり角を過ぎて、こちらに気がついたようだ。

そこには、ボロボロの服に、枯れた手足。見るからにゾンビがいた。
バ〇オハザード、ドラ〇エの腐った死体だ・・

「うぷ・・・吐きそう…」

タロウは一瞬顔を背けた。

ゾンビは好機と捕らえたのか、奇声を発しながら手を触手のように伸ばし、襲いかかってくる。―（・―・）―――（・―・）―

「うわ！ヒ、ヒール～」

青白い光が手のひらから放たれる。

「やべー、どうしょう…」

回復魔法を敵に使っちまった…

「グアアア～」

ゾンビは慌てて、触手を引っ込める。どうやらヒールに当たった部分が、崩れ落ちている。

「おや？　効いてる？」

タロウはさらに、ゾンビに向けてヒールを放つ。

「グアアア～」

ゾンビの右半分に当たり、当たった所から乾いた紙粘土のようになって崩れ落ちた。

「やっぱり効いてる～♪」

どうやらアンデェット系モンスターには、ヒールは効くようだ。

半身になって身動きの取れないゾンビにトドメのヒールをして、タロウの初戦闘は幕を下ろしたのであった。

閑話　初戦闘から数日後

今タロウは、新緑寮の自分の部屋にいた。

初戦闘から数日、一週間に一度のお休みの日である。

迷宮内の戦闘は、相変わらずヒールの連発で事足りていた。　しかし、これからの事を考えると、ヒールだけでは如何なものかと思い、保有スキル：聖別技術：を試してみようと思ったのだった。

早速、神様から貰った本を開きスキルの詳細を見る。

聖別技術とは？

物に聖なる波動を込める技術。

例えば、武器や防具に使えば聖属性が付加される。

また場所に使えば、対アンデェット系防御結界や対毒結界効果がある。

聖別の仕方としては、物や場所に聖印とルーンをを印して神力を込める。

と書いてあった。

「結構、応用がある技術だな～　試しに何かやってみよう！！」

早速、アイテムカバンから聖別に必要な道具類と銀製のゴブレットを取り出した。

ゴブレットは迷宮2階層の宝箱から出たもので、‥ 旅人の杯‼ と言うものらしく、傾けると水が湧いてくる杯である。

まずは、聖印を描く為の絵の具をつくる。乳鉢に孔雀石を入れて粉にし、そこへ膠(にかわ)を入れて混ぜれば、緑色の岩絵の具の出来上がり。

あとはゴブレットに、筆で聖印と神力の作用を示すルーンを描く。

それを聖詩を繰り返し唱えながら、神力を込めれば出来上がりである。繰り返し繰り返し唱える事に、絵の具で書いた聖印とルーンが光りだす。しばらく光っていたかと思うと、絵の具で書いた所が溝になり、彫り上げた様になって出来上がった。

刻んだルーンは浄化である。さっそく出来上がった杯を、傾けると、青白く光る聖水が溢れだす。名付けて‥ 聖水の杯‼ 。

「よし、上手く出来たみたいだ。」

これで、対アンデェット系の秘密兵器が完全したとほくそ笑むタロウだった。

１０階到着！！（前書き）

時間の流れが早いです

１０階到着！！

初戦闘から半年後

タロウはやっとこ、迷宮１０階：試練の間：のラスボス：巨大スケルトン：の前に来ていた。１０階到達は、だいたい早い人で２ヶ月から３ヶ月で、一般より少し遅いペースだ。

タロウはこの半年を振り返る。

最初にゾンビと戦ってからと言うもの、暫くは明けても暮れてもゾンビだった。まるでバ〇オハザードだ（うげ～）

ゾンビが終わると、今度はスケルトンだった。骨、骨、骨―（・―・）―

スケルトンも、ヒールを連発で倒し、最後は、ゴースト。これは、聖水を振りかけるだけで倒せた。

なんだかかんだ、１０階のラスボスである。

「それにしてもデカい！」

高さにして１０ｍ位だろうか？

部屋の奥には、：階層の祭壇：が見える。この祭壇は各階の下り

階段の部屋にあり、スキルの伝授や報奨アイテムを貰える祭壇である。

「さてどうしたものか…」

巨大スケルトンは、大きいだけで動きは鈍い。しかしながら、巨大なためヒールでは拉致があかない。

まだ相手はこちら気づいていないようだ。

「……」

タロウの保有スキルには、攻撃魔法らしい物はない。どちらかと言うと、回復・ステータス異常回復が概ねだ。

考え始めて数分後

タロウは杖に神力を込めると、試しに地面をなぞる。すると光りの軌跡が落書きとなって現れた。

「よし！これで行こう！」

タロウはゆっくりと、ボスを中心に円を書くように周り始めた。

ゆっくり…
ゆっくり…
ゆっくり…

気づかれないように。

タロウは基本ビビりである―（・―・）―

円を書き終えると、聖印（シジル）と浄化のルーンを描く。

タロウは聖詩を唱える。

全ての火たちよ～主を讃えよ。

全ての水たちよ、主を讃えよ。

全ての土たちよ、主を讃えよ。

全ての風たちよ、主を讃えよ。

※以下繰り返し

詩の詠唱と共に、地面に描かれた円が青白く光りだす。

ある程度経つと、さすがに巨大スケルトンも異変に気づき始めた。

タロウに向かって来る。

ドスン…

ドスン…

ドスン…

「う、うわ！やべー」

巨大な手がタロウに迫る。

ドン！

スケルトンの攻撃は、見えざる壁に阻まれてタロウに当たる事はなかった。

「ふう～死ぬかと思った！」

どうやら聖別により、結界内にボスを閉じ込められたようだ。

ドン！ドン！ドン！

なおもスケルトンは叩き続ける。

すると壁にひびが…

とっさにタロウは、詩の詠唱を再開する。すると壁のひびが消えていった。

「うーん…気が遠くなるけど、ボスが消滅するまで唱えねば…」

それから1時間詠唱して、ようやくボスは消滅し、精魂つきたタロウであった。

１０階到着！！（後書き）

戦闘シーンもとい駄文です

閑話　時間と金

サイド　新緑寮の自室

異世界で約半年、現実世界で約８日間が過ぎ、タロウは、自室で１人思索にふけっていた。

タロウの生活は、夜から明け方に異世界へ。（異世界で１週間）そして日中は現実世界に帰り、寝るの繰り返しである。さすがに、いままでもニート生活をしてきたが、周りの家族の目が厳しくなってきたのだ。

また新緑の宮をクリアーしてからは、他の迷宮やミノスを観光してみたくなったのだが、迷宮によっては攻略に時間がかかるので、月単位で異世界に滞在しなければならない。１週間したら現実への繰り返しでは時間がたりないのだ。

当面の課題は時間とお金がたりないのである。

以上の点を踏まえてタロウが考えた解決策は、どこかに就職したことにして異世界で現金を稼ぐことだった。
就職さえすれば、家を空けても家族も文句をいわず、異世界観光の時間もできる。

「さて、どうしたものか・・・」

タロウは、首にかけたチョウカーから現金に換えられそうなものを探し始めた。

ミノスの硬貨・・・・　（質屋で換金できるだろうが、あんまりもっていくと出所を聞かれてまずい）

宝石類・・・・　（さらに、換金しづらい・・・・）

剣や鎧・・・　（マニアにはうれるが、剣とかは銃刀法に引っかかる・・・）

「ちょっくら、街いってくるか！」
さっそく、身支度をして出かける。

◆◆◆

タロウはいま、始まりの街ミノリスに来ていた。言わずとしれた新緑の宮のある街である。
大陸の南に位置し、北側には山。南には海で、典型的な中世ヨーロッパ的な湊街である。

建物や道路が石作りのメイン通りにを歩き、露店を覗いて周っていた。
食べ物・・・

武器・・・
薬　・・・

などなど、さすがに迷宮を抱える街だけあって立ち並ぶ露店もさまざまだ。
　そんな中、タロウは一軒のアクセアリーの露店に足をとめた。

指輪にイヤリング。髪飾りにブローチ、ネックレスなどなど。どれも銀製で、　デザインは豊富である。

「うーん、指輪とかはサイズがあるからすぐ売れるかわからないけど、デザインもビンテージっぽいし、市場価格より安くすればうれるかも・・」

　タロウはそこで、男モノの指輪を1つ買った。値段は銀貨5枚（5万）位だ。

それから、タロウはさっそく現実世界に戻り、ネットオークションに出品するのだった。

現実世界で数日後・・・

「お、売れてるし！ミノスで銀貨5枚（5万円）だったのが、2万5千でうれてる。」

まあ換金率からすれば、１：０．５ではあるが、リアルマネーを稼げる目処は尽きそうなので、タロウはほくそ笑む。

「よし、しばらくはミノスとこちらで行商だ！」

しばらくは金策に励むタロウであった。

閑話　時間と金　（2）

現実世界でタロウがネットオークションをし始めて４週間後。タロウは、１０万の売り上げを手にしていた。

「以外に増えないなあ・・・」

ネットオークションも最初のうちは、調子よく売れていたがここ最近売れ行きが思わしくない。

アクセサリーなどと言うものは、個人の感性にあわなければ売れないものである。

また、もう一つの原因としてはやはり換金率に問題があるようだ。

リアルマネー：銀貨＝０．５：１である。品物を売って行商すればするほど、ミノスでの持ち金は減り、仕入れができないのだ。

「うーん、考えがあまかったなあ・・・　現実で売れば売る程、元手が無くなる・・・　今の現状は、ミノスから輸入してばかりの状態だ。逆に銀貨を獲得する、輸出をしなければ・・・」

しばらく、ミノスに輸出する物を考えていたが、一向に浮かんでこない・・・

「これは、一時ネットオークションを休業してミノスで下調べが必要だな。」

そうタロウは結論づけると、さっそく転送門を開いてミノスに向かうのだった。

サイド　ミノリス（港街）

「さて、何処へいこうか・・・」

今日は新しい輸出のアイディアを得ようと、いままで行ったことがない場所に行ってみようとタロウは考えていた。

タロウは行ったことがない場所が無いか、頭の中でリストアップしていく。

半ば、異世界時間で1年半近くいればミノリスの大体の場所はいっていた。

「何処かないかなあ～」

次第にタロウは、行ったことないところ　↓　行った回数が少ない

とこ　を考え始めた。

「あ、そういえば。　神殿はあまりいったことないなあ～」

今更だが、タロウは神聖魔法を使うので職業のくくりから言えば、神官である。ただ、迷宮に潜る前に神官としての登録くらいしか神殿にはいってなかったのであった。

「よし、今日は神殿にいこう！」

こうして、タロウは神殿へとむかうのであった。

タロウの向う神殿は、港町の北に位置する小高い丘に建っていた。大理石の太い柱が建ちならび、見たとこはギリシャのアテネにあるような神殿である。

石畳の敷かれた参道を通り、神殿の中へと入っていく。神殿は、神官のギルドとしての建物と、併設する病院がある。今日は、併設する病院にいってみることタロウはした。

病院にはいると、まず人々が集まるロビー（待合室）。さらにそこから奥に進んでいくと、神聖魔法を使って病を癒す、施術室。そして最奥に薬を出す薬局があった。

ミノスでの病の治し方で一般的なものは、神聖魔法による自然治癒力を高めて薬湯を飲むのが一般的である。

そして、タロウが薬局までくると。１人の薬局職員と思われる老神官から声をかけられた。

「もし、そこの方。薬剤を届けにこられた方ですか？」

「いえ、私は医術の見聞を広めるためにきた、下級神官です。」

さすがに、ただ興味本位で病院に来たなどと言えず、それらしいことをタロウは言う。

「そうですか、・・・」

あからさまにタロウの言葉に、老神官が溜息をはいた。

「どうかされたんですか？」

「はい、実は。ミノリスのさらに南の小島からいつもなら薬草がとどくはずなんですが、先日大規模な火災がありまして、薬草が焼失・・・　今は、陸路を使い他の生産地から取り寄せているんですが、まだ届かないのですよ・・　その薬草は、カッハ呼ばれるもので、さまざまな薬の原料なんですが、。。」

「そうですか、・・　見たところ患者さんもたくさんおられるようですし、あと何日くらいで薬が底をつくんですか？」

「そうですねえ。。　もってあと半月でしょうか・・・」

老神官は、苦渋にみちている。

「それは、お困りですね。。。私でよければ何かお手伝いできればよろしいのですが。ちなみに、そのカッハを見せていただいてもよろしいですか？」

「どうぞ。」

老神官がおもむろに、緑の葉っぱを手渡す。

タロウは、それを受け取り、しげしげと眺め匂いを嗅いでみた。
すると、鼻に独特の清涼感が吹き抜ける。
（これは、ペパーミントだ・・・）

「あの～、薬効について保障はできないんですが。これとにた香草なら1週間以内に用意できると思います」

「本当ですか！ぜひ、おねがいします。」
老神官は、床に頭をすりつけて懇願してきた。

「はい、わかりました。　本当の薬効については、自身がないので・・それでも持ってきます！！」

「ありがとございます！！」

「でわ、1週間以内には持ってきますので・・」

こうしてタロウは、神殿を後にし急いで現実世界に戻ったのだった。

薬草を届けよう　（前）

サイド　現実世界

タロウは、現実世界にもどると急いで自宅の庭へときていた。タロウの母も、数年前のガーデニングブームで庭にハーブを植えたりしていたからだ。もちろんお目当てのペパーミントも庭一面に生えている。

（ペパーミントも路地に植えてしまうと、管理を怠ると庭一面に生えてしまう・・・）

数時間かけて、大体、直径４０?くらいの束を5つ収穫した。

「よし、これをもっていこう！！　カッハであってくれればいいんだが。。。」

淡い期待をしながら、急いでミノスへとトンボ帰りをするのであった。

数日後・・・・（ミノス時間）

「もって、きました。」

タロウが、老神官に手渡す。

「おお、これは！まさしく、カッハですよ！！　ありがとうございます。」

「いえいえ、お礼は薬効を確認してからおねがいします。」

「であ、さっそく確認をいたします。よろしければ、ご一緒に薬房にどうぞ。」

「はい、」

タロウは、老神官につれられて薬局裏にある薬房に向かった。

薬房の中は、ところ狭しと薬草やら、乳鉢・窯などの機材であふれている。

老神官は、タロウの持ってきたペパーミントを乳鉢にいれるとすりつぶし始めた。

「薬草、とりわけカッハの薬効ですが。薬草どうしの副作用を抑える働きです。いってみれば、中和剤ですよ」

「ふむ、なるほど。やはり薬とは、毒でもあるんですね。」

「まさしく、その通りです。使い方や、数量などなど。大事ですな。
　さて、このすりつぶしたカッハですが、薬効の強さは含まれる神力に影響されます。そして、これがその神力を計る試薬です。」

「神力が強いと、どうなりますか？」

「これは、雪石英を砕いた粉でして。神力の強さに反応して、薄い

青～深い青になります。」

「強さは、含まれる神力が少ないのが薄い青。多いが深い青ですか？」

「その通りです。　でわ入れてみましょう。」

・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・・・・

「ふむ・・・、　これは、薄い青ですね。薬草としては、、、使えませんね。。」
老神官は、ひどく落胆する。

「なんとか、使えないのですか？」

「そうですね、現実的でわないのですが。大量の聖水と混ぜて精製すれば。おそらく使えます。　ただ、これだけの薬のために必要な量というと。　神官が5人がかりで3週間かかってしまいます。それでわ、間に合いません・・・・」

「じゃあ、大量の聖水があればなんとかなるんですね？」

「はい・・・」

タロウは、老神官から見えないところでチョーカーから”聖水の杯”を取り出した。

「これは、迷宮で手に入れたものですが。傾けると聖水がでてきます。よかったら、差し上げあげますので、病院でお使いください。」
（実際には、タロウが聖別して作ったものである・・）

「ほ、ほんとうですか！？　聖水が本当にでてくるのならば、聖遺物ですよ！？」

「聖遺物とは、なんですか？」

「聖遺物とは、我々の祖先が次元を渡りこの地に来る前に作られた遺物です。現在では、とても貴重で、めったにないものです。」

「そうなんですか！？」
（俺が、作ったんだけどなあ・・・）

「ええ、それひとつでこの街がそっくり買えます・・」

「！！！！　そんなにすごいものなんですか。。。」

「はい、ですです！！」

「ですが、私にはもう一つあるので、この街の方々の為にお使いください。」
（実は、迷宮でもう一つ”旅人の杯”をてにいれて、聖別して持っていのだ・・）

「！！！　ありがとございます。受け取るかは、別として大事にお借りいたいします。」
深々と老神官は、頭をさげた。

「いえいえ、私にできることをしたまでですから」
（なにより、平凡だった自分がこんなにも人の役にたてるのだ。嬉しい！）

「でわ、さっそく薬の調合にはいりますので。2週間ほどしたら、またおいでください。その頃には、調合もひと段落しておりますので。」

「はい、わかりました。また、」

こうして、タロウは無事に薬草を届けたのであった。

薬草を届けよう　（後）

それから、異世界時間で２週間後（現実時間で１４時間）

タロウは、神殿の老神官を訪ねていた。

薬房の中に入ると、老神官が数名の神官に作業の指示を出している。

「こんにちは、カシスさん。」

タロウは、老神官に声をかける。

（今更だが、老神官の名前は、カシスさんである。）

「タロウ殿。ようこそおいで下さいました。」

老神官は、人好きのしそうな笑顔でタロウを迎えてくれる。

「薬の方は間に合いましたか？」

「おかげで、助かりました。」

「それはよかった　（笑）」

「これもすべてタロウ殿のおかげですじゃ。本当にありがとう。」

「いえいえ、お役に立てて何よりです。」

「ついては、お礼を兼ねてお茶をご一緒しませんじゃろか？」

「ぜひ、よろこんで」

「でわ、参ろう。ギルドホールにわしの部屋がありますでのう」

こうして、タロウはカシスと共に神殿に向かった。

カシスさんの後ろに続いてだいぶ神殿の奥までやってきた。
（途中、数人の神官らしき人とすれ違ったが皆、カシスに頭をさげていく・・・）

「つきましたぞ。入りなされ」

重厚な扉を開け、中に入ると質素ではあるが品の良い調度品が目につく。
タロウは勧められるままに、樫でできた応接セットに腰かけた。
2人が、イスにこしかけると。若い神官がお茶をもってきた。

「まずは、熱いうちにどうぞ～」

「はい。いただきます」

運ばれてきたお茶は、鮮やかな赤い色をしたローズピップティーのような飲み物だった。
飲む度に爽やかな酸味が口いっぱいに広がっていく。

ある程度のどを潤すとタロウは、話を切り出した。

「あの～。カシスさんはいったいどんな方なんですか？」
（神殿にこんな立派な部屋があり、すれ違う神官の様子からタロウは訝しがっていた）

「ほっほっほっー。　しがないただの薬師の老いぼれじゃ」

「しがない老いぼれであれば、こんな部屋は与えられていないでしょう？」

「まあ、そうじゃのう。（笑）　今は田舎の薬房で隠居しておるが、少し前までは中央神殿に務めておった。その頃は、そこで大神官などと呼ばれておったがのう。」

「大神官ですか！？　すごく偉いんじゃないですか。」
（大神官とは、どの神殿にも1人いるギルド長みたいなものである。しかしながら、中央神殿の大神官ともなれば、ミノス全域のトップとも言える。）

「まあ、今は引退した老いぼれじゃ。　それよりも、タロウ殿こそただの下級神官ではありますまい？」

どうやら、タロウが短時間で大量の薬草を入手してきたり。聖遺物を複数もっていることをいっているようだ・・

「いやいや、コレを見ていただければわかりますが、しがない下級神官ですよ」
タロウは、懐からジルコンの帰還石をとりだし、カシスに渡す。
（新緑の宮をクリアして、ヘマタイト（初心者）からジルコン（初級者）へと変わっていた。）

カシスは、帰還石に手をかざした。

「ふむふむなるほど。　確かに神聖魔法レベル杖の扱い共に平凡じゃな・・」

「そうでしょう・・　（汗）」

「しかし、タロウ殿はウソをついておりますな？」
ジロリとタロウを見据える。

「あははは。ウソなんかついていませんよ　（汗）」

「本当かな？　聖遺物は、確かに迷宮で手に入ることもあるが、それは最上級ランクS迷宮での話じゃ。しかし、タロウ殿はまだ初級と呼べるレベル。とても、S迷宮などクリアーできまい。または、王家が管理しているものもある。じゃががタロウ殿は、王族にも見えぬが・・」

「あはははは　・・　（汗）　いやあ、幸運にもF迷宮”新緑の宮”で、出るかもしれないじゃないですか＾＾；？それに、平凡な顔ですが王族かもしれませんよ？　（汗）」
タロウは、苦笑しながらごまかす。

「タロウ殿。それはどちらもありえないのですじゃ。まず迷宮は神が創ったもので、迷宮の掟には聖遺物はS迷宮からと書かれておるし。王族は、代々神力をあつかえん。」

「・・・・・・・」

「さて、もう一度聞くがが、タロウ殿は何者じゃ？」

カシスは、タロウに観念して話せと目で訴えている。

しばらく、タロウは身の危険がないか逡巡した。そして、カシスの人柄を思い浮かべる。神殿の最高権力者になったような人が、薬のために頭を下げたのを思い出す。その真摯な態度は、あって間もないがカシスを信用してもいいよう気にさせたのだった。

「わかりました。包み隠さずお話いたしましょう。信じていただけるかわかりませんが。・・・」

こうして、タロウは異世界から来たこと。
神様に会い、異世界間を行き来できること。
前世の能力で聖別技術が使えることを話し、実際に使って見せた。

「・・・・・　にわかに、信じがたいがのう。目の前で聖別も見たことだしのう。信じますじゃ。」

「ありがとうございます。」
（やはりカシスは思ったような人柄みたいで、タロウはほっとする。）

「ただ、一点タロウ殿に申しあげておきたいことがありますじゃ。」

「なんでしょうか？」

「実は、先ほどの聖別じゃが。タロウ殿のレベルの術はおそらく、タロウ殿しか扱える者がおらん。我々ミノスに住むものは、せいぜい使えても結界くらいじゃ。」

「本当ですか？」

「ええ、聖別は祖先たちがこちらの次元に来るときにほぼ失われてしまった技術。ここ数百年でやっとこ結界として復活したくらいですじゃ。」

「そうなんですか・・・・」

「うむ。なぜならば、聖別を使うものしか転送門をあけられなかったのじゃ。だから、文明ごとこちらに移住したときに、みな聖別を使えるものはあちらの世界で死んでしもうたとつたえられていますじゃ。」

「そうだったんですか。すごいスキルだったんですね」
（タロウは内心、自分のスキルに驚いていた。こんなチートだったとは・・・）

「だから、タロウ殿が聖別ができる事は今後話さないほうがよいと

思いますじゃ。いろいろな権力争いなどに巻き込まれるからのう・・
」

「はい、気を付けます　（汗）」

「うむうむ。してタロウ殿。肝心の薬草の報酬なんじゃが、」

カシスは懐から銀貨の詰まった包みと、聖水の杯を取り出し、机におく。

「ここに、銀貨が２０枚ほどはいっておる。カッハの代金が６枚、聖水の代金が１４枚。ですじゃ」

「薬草の代金はわかりますが、聖水の杯は差し上げたもので、そこから出た聖水からの代金は、受け取れません。」

「タロウ殿ならそういうと思っておったが、こちらとしても事情があるのじゃ」

「事情とは？」

「そうじゃのう・・・」

カシスの事情・・

その１）聖遺物などと言うものが、急にあらわれてると出所の問題がでてくること。
その２）神殿の中立性の関係上、莫大な寄付は受けられないこと。

「とまあ、こんな理由で、聖水を買った形にしたのじゃ」

「なるほど、わかりました。じゃあ、その杯はカシスさんにお預けし、必要に応じて使った聖水の分の代金を、私のギルド口座に入れていただけませんか？値段は相場の半分でよろしいので・・」

「タロウ殿がそれでいいのならば、それはたすかる。聖水自体は、薬の薬効を高めるためにあるに越したことはないのでのう」

「いえいえ、人助けになるってお金が入るならこんないいことなないですから　（笑）」
（昔の人の言葉に、最高の仕事とは、好きで人のためになり、利益を得るっとあったようなきがする・・）

「しかしそれでは、わしの気がすまんのう。おぬしがよかったらこの薬房で、薬草について学ばんかのう？　わしでもある程度はお教えできますぞ」

「本当ですか？ぜひ教えてください」

今回の事により、タロウのいる現実世界とミノスとは重なりあっている部分があることがわかった。
さらに、薬草について学んでいけばペパーミントのほかにも採れる薬草があるかもしれない。
タロウの現実世界からの輸出には、大きな力となる。
そんな打算のもと、タロウは返事をしていた。

「それでは、また明日から神殿にくるとよい」

「はい、また明日。」

こうして、タロウの神殿通いが始まったのだった。

薬草はあちこちに

タロウの薬草学習も早、半年（リアル約一週間）をむかえていた。
いろいろと学んだ結果、リアル世界の薬草もミノスの薬草とかなりかぶるものがあったのだった。

アロエ、ヨモギ、スギナ、ドクダミ、タンポポ、オナモミ・・・・
　などなど。

ただ、リアルでとれる薬草はカッハにもれず、神力が足りず聖水を用いないと、使えなかった。

タロウは今、自宅周辺の空き地に薬草を取りに来ていた。
もとは建設資材の置場であった空き地一面に、雑草が覆い茂っている。

そのなかで、お目当てのスギナを見つけ、採り始めた。
スギナとはいわずとしれた、雑草である。
（つくしの仲間らしい？）

現代は抗生物質などの薬が大半で、薬草などは身近ではないがスギナは、解熱に効果のある薬草だ。
（作者のウル覚えなので、あしからず・・）

もっとも現代では、アスファルトの隙間などから生えてくる迷惑な

雑草かな。

「それにしても、カシスさんに頼まれたからとりにきたけど。こんなの役に立つのだろうか・・・」

どんなに学んでも、実践経験のないタロウにとって雑草にしか思えない。

１時間ほどで、およそ４ｋｇのスギナをとれた。これで銀貨１０枚（１０万円）とは、ぼろい商売である。

それからしばらくは、近所の空き地。多〇川の土手などなどタロウは採取に出かけるようになるのであった。

旅立ち　再（前書き）

とにかく、駄文です・・・　よんでくださる奇特なかた。ありがとございます。

旅立ち　再

タロウがカシスの元で修業を始めて2年。（リアル1カ月）

この2年間でタロウは、薬草から応急手当。または、ミノスでの風習や常識などなどを教わっていた。

薬に関して言えば、初級薬師の資格がとれた。（ちなみに薬師は、初級から上級まであり、初級は民間薬局。中級は、貴族御用達。上級ともなれば王室お抱えレベルである。）

「ふう、ちょっとの好奇心から大分のめりこんでしまったなあ。スキルも取れたこどだし、そろそろまた旅にでてみるか。一応、カシスさんには挨拶していかねば・・」

タロウの場合は、どこぞのテンプレ異世界ものとは違い、いつでもリアル世界に帰れるため、基本旅行気分である。

薬房で、いつものように作業を終えタロウはカシスさんに、旅に出る旨を伝える。

「そろそろ、旅にでようかと。いろいろと、お世話内なりました。（ぺこり）」

「いやいや、こちらこそ助かったのう。聖水や薬草の礼じゃ。問題ない」

「いやあ、それでも初級薬師の資格までとれたので。本当にありがとうございます。」

「いやいや、おぬしの覚えがよかったのじゃろう。しておぬし、次に行くあてはあてはあるのかのう？」

「そうれなんですが、まだ迷宮もＦ迷宮しかいったことがないので、次のランクの迷宮でもいってみたいかと。」

「ふむ、次のランクとな。Ｅ迷宮となればここより、北西の砂漠の街。アブベルじゃ」

「アブベルってどんな街なんですか？」

「そうじゃのう、アブベルは砂とアビヌの民の街じゃ。」

「アビヌの民ってなんですか？」

「ふむ、アビヌの民とはわれ等の先祖がこちらの世界（ミノス）にわたってきたときに、一緒に来た種族じゃ。たしか、クレタ島の南の大陸が起源と言われている犬耳人じゃよ。」

「犬耳人！！　犬耳の亜人ですか？」

「そうじゃ、犬耳がついておる。背丈は、平均が１６０ｃｍ程度だが身体能力が高く、おもに戦士が多いかのう。」

「へえ、リアルもふもふだあ　・・・」

（タロウはかなりにニヤケている）

「リアルもふもふとやらは、わからんが（汗）、えらい嬉しそうじゃのう。ちなみに、アビヌの民は少し、閉鎖的なところがあってのう。街に入るには紹介状が必要じゃ。」

「紹介状ですか、、どうしよう・・・」

「なに、心配はいらん。おぬしは初級薬師だから、薬師の証をみせればよい。」

「なるほど、であ重ね重ねありがとございました。それでは、失礼します。」

「いやいあ、たまには、こちらにも顔だすのじゃぞ。達者でな」

「はい＾＾　カシスさんもお元気で。　」

こうして、タロウのミノリスでの薬師修業は終わり。一路、E迷宮のあるアブベルへと旅立っていくのであった。

アブベルの街（前書き）

前話で、コプトの民⇒アビヌの民に変更いたしました。既存の宗教に同じ名前があったことをおもいだし、不快な思いまたは、あらぬ誤解を避けるため変更しました
。申し訳ありません。

アブベルの街

アブベルの街は、ミノリス（始まりの街）から海路で二日で行ける街である。
大陸的には、ミノリスの北西に位置するが、ミノリスとアブベルの間には高い連峰があるため、移動はもっぱら海路が主流だ。

タロウはアブベルの端に位置する港についた。
降り立つとむわっと熱い熱気が吹き抜けていく。港の周辺と街へと続く街道には、ナツメヤシが林をつくり、そこを過ぎれると見渡す限り、砂漠である。

港からのラクダの乗合馬車に揺られて1時間。ようやくアブベルの街に到着した。
見渡す町並みは、オアシスを起点として環状に干し煉瓦で作られた建物が幾重にもならんでいる。
行き交う人々は、古代ローマ時代の鎧を身にまとったものから、サリーに似た布をまとってきる人々がいるなど様々だ。

「だいぶミノリスとは違うなあ。」

どちらかといえば、ミノリスは中世ヨーロッパ的な街であったが、アブベルはどちらかというと、タロウの世界でいうエジプトに赴きがにていた。

馬車からおりると街の入り口に兵士らしき人がいる。通行人の確認をしているようだ。
いそいそとタロウも街の検問の列へとならんだ。

「おお、あれがアヌビの民か。確かに、犬耳がある・・・イメージ的には、ファンタジーで出てくるコボルとに近いなあ。」
（あの耳触触ってみたい・・・）

いよいよタロウの検問の番がやってきた。

「おい、お前。見慣れぬ髪と肌だなあ。アブベルへは何用か？」

「私は、ミノリスから参りましたタロウと申します。アブベルへは、迷宮挑戦の為に参りました。ギルドが発行する。帰還石のほかに、初級薬師の証がここにございます。」

「ふむ、どうやら本物ようだ。迷宮挑戦については、あまり喜ばしくはないが薬師は大歓迎だ。ここアブベルは熾烈な環境ゆえ病は多い。滞在中は存分にその腕を振るってくれ。」

「はい、ありがとございます。」

こうしてタロウは、無事に街へと入ることができた。

「さて、まずは神殿に行こう。いろいろと迷宮や街のことを知らなくては。」

こうしてタロウのアブベル第1日目は、犬耳を触りたい衝動を抑えることからはじまったのである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8363t/

前世と私 続

2011年11月16日16時51分発行